

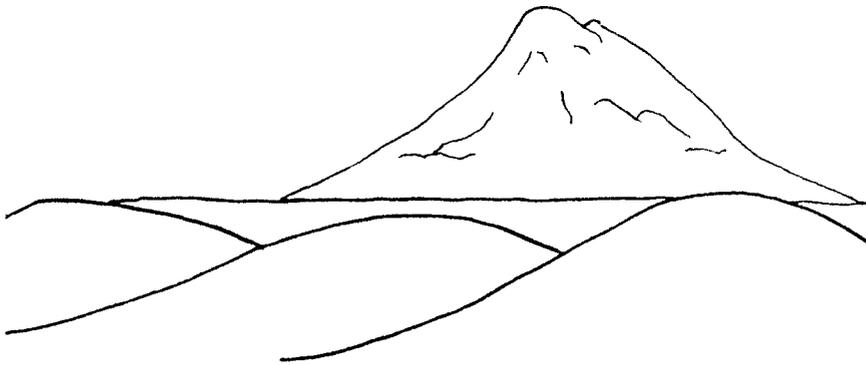


北スラウェシ日本人会
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

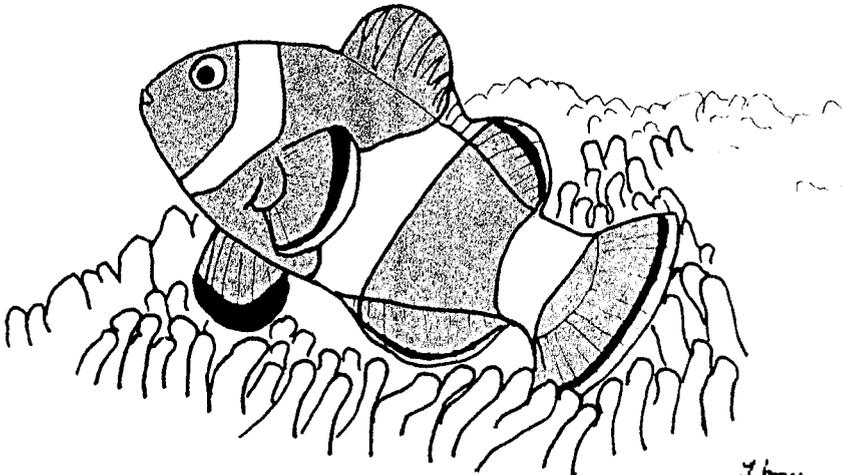
日本人会会報

Tarsius

タルシウス



第11号



7/10/00

目 次

ページ

1.	総領事挨拶	後藤 昭	1
2.	着任挨拶	竹森祥則	2
3.	着任挨拶および領事連絡について	佐藤祐二	3
4.	鳥インフルエンザに関する注意	日本大使館	4
5.	異環境下での44年	石野 絳	6
6.	日本語研修センター開校	日本語研修センター	9
7.	インドネシア人が日本で働くには?	上杉祐子	11
8.	Kita so mo pulang ke Japan	吉田朋子	12
9.	日本人墓地と海軍慰霊碑(報告)	長崎節夫	13
10.	インドネシアと私とキリスト教	青木次郎	15
11.	椰子酒	長崎節夫	17
12.	編集後記		19

早いもので、当地に着任して1年が過ぎました。

昨年度は、私と先方の双方の都合がつかず北スラウエシ州への公式訪問を実施することが出来ず、従って、北スラウエシ州日本人会の皆様にお会いする機会を持てませんでした。本年度は是非とも実現させたいと思っています。

インドネシアでは、昨年度も様々な事件・事故が発生しました。北スラウエシ州日本人会の皆様は、基本的には無事にお過ごしのことと存じます。これは偏に、皆様が平素より、当国の法律を遵守し、現地の文化・慣習等を尊重されていることによるものと思っています。また、インドネシアでは、今まで鳥インフルエンザのヒトへの感染による死者20余名が出ています。幸いにも、北スラウエシ州では、今まで感染者及び感染死者が出たとの報には接していませんが、皆様におかれましては、普段から、鳥フルに感染しないよう十分に気をつけて頂きたいと思います。

昨年、北スラウエシ州では、州知事・副知事及びピドゥン市長選挙が実施され、それぞれ新体制で州及び市の運営が行われていると思います。皆様ご承知のとおり、北スラウエシ州ではキリスト教徒が人口の多くを占めていることもあり、イスラム教徒との間で軋轢は生じていません。従って、北スラウエシ州は概して治安情勢が良いと言われており、インドネシアの他の地域程にはテロの脅威等は無いと認識しています。但し、前述しましたように、鳥インフルエンザ対策には、十分に注意を払ってください。

最後になりましたが、近い将来、皆様にお会いできる日を楽しみにしております。

在マカッサル日本国総領事
後藤 昭

在マカッサル日本国総領事館
領事 竹森祥則

昨年2005年9月に赴任してまいりました。総領事館では、インドネシアの政治や治安情勢、広報・文化などを担当しており、今年4月からはマカッサル日本人会の理事の役割も果たすこととなりました。在マカッサル日本国総領事館は、スラウェシを含む東インドネシア地域を所管地域としており、当館から北スラウェシへ出張で訪れる機会もあるかと思っておりますのでその際にはよろしくお願ひします。

首都ジャカルタの街を見ると、高層ビルが林立し、大きなショッピングセンターが幾つもあり、各地の道路を渋滞させるほど沢山の車が走っていて、これらの様子はインドネシアの発展振を感じさせるものがあります。そのような発展振りは地方都市にも徐々に波及し、地方でも人々の暮らしは随分豊かになってきているように思われます。こうしたインドネシアの経済発展は、外国投資や貿易など日本をはじめとする諸外国との経済交流が大きく寄与していると思われます。また、これまで感じたことは、日本政府やインドネシア政府、あるいは民間機関のプログラムで留学や研修、交流プログラムで日本に滞在した経験のあるインドネシアの方々が増えていて、日本語を話したり日本のことをよく知っている方にお会いする機会があり、人の往来も随分増えていることです。

日本とインドネシアとの間は、経済関係ばかりでなく人的交流もかなり高まっています、両国はますます近い関係になっています。今後、この関係がさらに進展していくことができるとよいと思っています。

着任挨拶及び領事連絡について

在マカッサル日本国総領事館
佐藤祐二

北スラウェシ州日本人会の皆様、初めまして。在マカッサル日本国総領事館の佐藤祐二と申します。横山の後任として、昨年3月22日に着任致しました。北スラウェシ州日本人会の一部の方には既にお会いし、また、一部の方にはお電話にてお話させて頂き、更に当館から発出しております「総領事館からのお知らせ」は、基本的に私のメールアドレスから発信させて頂いており、「いまさら・・・」という方もいらっしゃるかと思いますが、初めての方もいらっしゃると思いましたので、今回の寄稿を機会に改めましてご挨拶申し上げたいと存じます。

まず挨拶は置いておいて、2月中旬に北スラウェシ州を襲った大雨の被害は大丈夫でしょうか。洪水、地滑り、橋の崩壊など大変だったと伺っております。皆様が無事だったことをお祈り申し上げます。

さて、昨年3月に妻同伴で着任し、特に大きな事故も無く一年が経ちました。とりあえず「ほっ」としておりますが、決して気を抜かず、常に周囲にアンテナを張り巡らし、業務に、また生活に充実した日々を過ごせればと考えております。

総領事館の業務では、領事業務も担当させていただいておりますので、皆様に直接関係ある事を二点ほど以下に記載させて頂きたいと思っておりますので、ご理解とご協力のほどお願い申し上げます。

①旅券について

本年3月20日よりIC旅券が導入されました。旅券にICチップを搭載し、旅券の偽変造や別人による不正使用防止の効果が期待されております。具体的には、旅券の真ん中ほどに、厚紙程度のシートが入り、そのシートの中にICチップが組み込まれており、ICチップには、身分事項ページの顔画像、氏名、生年月日、旅券番号、発行国などが記載されます。

今後発給する旅券は原則IC旅券となります。また、IC旅券への切り替えは、現在お持ちの旅券の残存有効期限に関係なく切り替える事が可能ですが、新規旅券発行手数料と同額の手数料が必要となります。

[10年旅券 Rp.1,455,000-、5年旅券 Rp.1,000,000-、5年旅券(12歳未満) Rp.545,000-]

②在留届について

旅券法第16条により、外国に住所または居所を定めて3ヶ月以上滞在される方は、その地域を管轄する日本大使館または総領事館にすみやかに提出することが義務付けられております。従いまして、まだ在留届を提出されていない方、または、お近くにお住まいの日本人の方で、在留届を提出されていない方がいらっしゃいましたら、ご提出を促して頂ければ幸いです。

北スラウェシ州には、領事出張サービス等でお伺いする事もあるかと思いますが、今後とも宜しくお願い申し上げます。

鳥インフルエンザに関する注意

11月17日

日本大使館

－ 予防 －

1. 鳥類に近づかない

(1) 養鶏場、鶏を扱う市場、鑑賞用鳥屋、家禽類飼育家庭及び動物園等への不用意・無警戒な立ち寄りや接触を避ける。

(2) 近所に鑑賞用鳥などがいる場合、鳥の状態に異状が見られたら十分警戒する。

(3) 鳥類の死体、内臓、排泄物への接触をしない。

(4) 生の鳥肉を処理した後は、手および調理器具をよく洗う。

*なお、鶏肉や卵を調理する際に加熱することも推奨されている。70℃以上で同ウイルスは死滅すると考えられているからである。しかし、たとえ、ウイルスに汚染された鶏肉を食べても感染する可能性は低いとも言われている。

2. 人混みへの立ち入りは最小限にし、外出後には手洗い、うがいなどの通常の感染症予防対策を励行する。

3. 通常のインフルエンザ予防接種の推奨。

(1) この通常のインフルエンザの予防接種は、鳥インフルエンザに対する予防の直接的効果は明らかではない。しかしながら、何らかのインフルエンザの症状が発生した場合には、通常のインフルエンザか鳥インフルエンザの何れに感染したかを判断する一つの目安となり得る。

(2) 通常のインフルエンザと鳥インフルエンザに同時に感染した場合には、ウイルスが感染者の体内で病原性の強い新型ウイルスに変異するものと考えられているので、そうした可能性を小さくする一つの手段にもなりうる。

－ 症状 －

初発時インフルエンザを疑う目安（トリ、ヒトの診断は発症時には不可）としては次のとおり。

多くの場合（症状が多様なので明確な基準作成は難しい）、いわゆる風邪様で急激に発症し、次の症状のあるもの。

(1) 38℃以上の発熱

(2) 悪寒

(3) 全身倦怠感

(4) 感冒様症状すなわち鼻漏、咽頭痛、咳、痰のすべてもしくは複数

(5) 頭痛、腰痛、関節痛のすべてもしくは複数

なお、鳥インフルエンザは、下痢がみられることがある。

－ 対応 －

1. 上記症状等インフルエンザが疑わしい場合、早急に最寄りの信頼できる医療機関を受診する。

2. 刻々と変化する状況（流行状況、感染の拡大、新型インフルエンザの出現）を早急に察知して、対応を変化させる。

異環境下での44年

石野 赫

「前記」

昨春のこと、1通のファックスが受信機から流れ出た。大学時代の同級生からのもので、本人が今委員をしている同窓会の会報に寄稿せよというものであった。短文で1千字前後、題材は自由で良いからと、親しい間でもあり半ば命令調であった。

小生、短文と自由という言葉につられ、何とかなるわいと軽く考え、即電話にて「受ける」と返事してしまった。しかし、数日経っても良い話題が浮かばない。そこで、再度電話をして「困った。書けない。誰か他に、、、、」と言い出すと、「海外ではらはらした経験でもあるだろ、それでも書いたら」とのヒントをくれた。再度書く気になって、メモまがいに書き下ろした。それが次の「本記」に転載した「異環境下での44年」の記述である。思えば、サンベルト下にある発展途上国での仕事は、大小様々なリスクに取り囲まれ、緊張の連続であった。

「本記」

毎年9月も終わりに近づくと、思い出すのが1965年インドネシアで遭遇した「9月30日事件」である。当時、ダム建設の為東部ジャワに駐在、初めての海外勤務でもあった。

10月1日、早朝から資材調達に出かけていた同僚が町の異常を伝えて来た。これが、前夜ジャカルタで起きた「クーデター事件」の第一報となったことを、その夜、NHK短波放送ニュースをキャッチして判った。

数日後、左翼系ウントン中佐がスカルノ大統領の元で共産政権樹立を狙って立ち上がったが、即刻スハルト将軍率いる部隊に鎮圧されたこと、このカウンター・クーデター部隊が余勢を駆って共産党員やそのシンパ狩りを始めていること、を知った。

そうこうする内に、この部隊がスカルノ大統領を幽閉した後、インドネシア共産党の拠点である中部ジャワで党員を殲滅しつつ、東に向かっていること等の情報が入ってきた。我々がいた東部ジャワも共産党勢力が強いと言われ、この鎮圧・掃討部隊の動きに緊張した。

我々は急遽米や日用品を買い集め生活に備えたり、使用している車に「日の丸」のマークを付けたり、地区軍司令部に日本人の安全確保を申し入れたりして、迫る危機に備えた。その内、川に首の無い死体が流れてきたり、あたりの山間から銃声が聞こえたり、焼討ちにあっている家が見えたりして、掃討部隊の到着を感じた。町では、軍や一般大衆による華僑（この事件発端の影に中国共産党ありと思われていた）への暴行・殺人・略奪も頻発しだした。

しかし、我々の所は多目的ダム建設現場という民衆の為の国家プロジェクトでもあってか、幸い直接被害を蒙ることはなかった。やがて、この赤狩作戦は更に東のバリ島まで進み終わりを告げ、年が明けて事態は終息していった。

後に、この事件での犠牲者はおよそ30万人と発表されたが、現地であのゼノサイドを目撃した者としては、この数字にかなり疑問を覚えるのである。初めての海外生活で、この血を見る体験は強烈であった。いつまでも脳裏を離れないのである。

実は小生、これで「暴動」に「憑かれて」しまったようである。仕事場所が変わったり、国が変わったりする都度何らかの事件に遭遇し、仕事に影響を受けていた。なかでも大規模なものは、1969年にシンガポールでマレー人と中国人の人種抗争に遭遇した事。1971年、東マレーシア・サバ州に滞在中、フィリピン大統領マルコスが同州領有権を宣言、それによるマレー系とフィリピン系の諍いに遭遇した事。また、1979年、イランで、ホメイニ革命により、ほぼ完成間近になっていた工事を放棄し、這うほうの体で帰国した事。1998年には、再度インドネシアであのスハルト大統領の転覆劇に遭遇した事。等などが強烈に思い出される。

引退して1年、44年間にわたって異環境下で体験した諸々の危険も、いつしかほろ苦い程度の思い出となった。今は、建設という仕事を通じて途上国の発展に寄与できた事に満足感を覚えるのである。

「後記」

以上が、転載分です。

小生、2001年9月－2004年2月、ビトンに駐在し港湾工事に参画したが、その間ポソ、マカサル、バリやジャカルタでテロ事件が発生し、一時緊張し、連鎖反応を意識した。しかし、ビトンは心配をよそに、終始平和であった。幸せな2年半であった。

この駐在を最後に引退した。昨年夏、ビトンを再訪し、担当した港湾施設が十二分に稼働しているのを確認したし、再建後の日本人墓地に参拝もできた。知己を得た友人とも再会し、この上ない喜びであった。帰国後間もなく、待っていたかのように狭心症に見まわれ、大手術を受ける羽目になった。これも無事通過し、改めて元気な孫達に囲まれながら、生きている幸せを今感じている。

しかし、自分が仕事をしてきた国々の事がどうも気になり、新聞の国際面を読む事から始まる毎日を送っている。東南アジア諸国、南西アジア諸国、中東諸国、ブラックアフリカ諸国、など等。それにしても、人の住む所、常に「トラブル」があり、あい変わらず、「人」の進歩を感じないのが寂しい、、、、

インドネシア、北スラウェシ州「ミナハサ日本語研修センター」が開校

インドネシア、北スラウェシ州ミナハサに建設されていた「ミナハサ日本語研修センター」が完成し、開校した。去る4月8日(金)に開校式が行われ、4月11日(月)から授業が始まった。同センターの施設は、民間の日本人と在日インドネシア人の寄附により建設され、校舎は3教室からなり、別棟に日本人教師の宿舎と事務所がある。

このミナハサは、インドネシアの他の地方と異なり、住民の殆どがキリスト教徒で、インドネシアの大きなキリスト教団体の一つ、ミナハサ福音キリスト教団の本部がある。同センターは、この教団本部の厚意により本部の敷地内に建設された。インドネシアでは、日本人が個人或いは団体で不動産、建物を所有するのが大変難しいため、同センターは、教団に移管され、教団運営のトモホン・インドネシア・キリスト教大学付属機関となっている。

専任教師は全て日本人で、既に日本からベテランの3名が着任しており、5月にもう1名が来る予定である。「ミナハサ日本語研修センター」の教育目標は、1年間で中級レベルを目指し、クラスは多くて17名までの少人数制をとっている。学生は、大学生、牧師、大学教授、その他一般人で、初年度は合計41名で、5クラスを編成することになっている。

インドネシアの日本語教育機関での日本語学習者人口は、8万5千人(国際交流基金、2003年調査)で、韓国、中国、オーストラリア、アメリカ、台湾に次ぎ6番目である。北スラウェシ州の日本語教育を行っている高等教育機関は、マナド国立大学、マナド外国語大学、サムラランギ大学とマナド国立専門学校で、日本語を学ぶ学生は、現在700人を越えている。また、高校においても第二外国語として学習されている。北スラウェシ州の日本語教育機関への教育指導に、日本の国際交流基金と国際協力機構から3名の日本人教師が派遣されている。

「ミナハサ日本語研修センター」の日本人教師宿舎は、単身赴任用のワンルーム形式、食堂があり、炊事、洗濯、掃除、警備にインドネシア人を雇用している。日本人教師の給与は現地並みであるが、宿舎使用等は無料である。また、この日本語研修センターは、パラボラアンテナを装備、各国のテレビ衛星放送が受信でき、また、ダイヤルアップ接続ではあるが、インターネット閲覧、メールの送受信もできる。

このように校舎、教員宿舎も完備しており、専任教師も全員日本人であり、しかも日本政府の援助が全く無く民間レベルで、友好と善意で開校した海外の日本語学校としては極めて珍しい。なお、同センターが現地キリスト教大学に移管されたため、いわゆるキリスト教の献金で設立されたと思われがちであるが、同センターの設立は、その多くが宗教の如何を問わない日本人及びインドネシア人(ムスリムも含む)の寄付によるものである。

同センターの初代校長は創立者の玉井三郎氏で、同氏によると数年後には日本語教師を日本人からインドネシア人に徐々に切り替えていく方針という。



全景（手前が事務所と宿舎）



校舎（後方の建物）



スタッフ一同

スタッフ写真前列右から

- ・ 市村 皓 主任教師（校長代行）
- ・ 玉井 三郎 校長
- ・ 青木 次郎 顧問
- ・ 長谷川 裕子 教師
- ・ 上杉 祐子 教師

後列左から

- ・ フランキー ナジョアン 顧問
- ・ ジェルミ ティラヨ 事務長
- ・ ミカエル ライントン 警備
- ・ アンディー スモアル 事務
- ・ ヘルマン ルミンバル 炊事
- ・ エドウィン スマフ 支援者
- ・ 鈴木 文彦 支援者

名称: Pusat Pelatihan Bahasa Jepang "Minahasa"

住所: Bukit Inspirasi Kakaskasen III, Tomohon
95362 Sulawesi Utara, Indonesia

電話: xxx62-431-315-9969

Fax: xxx62-431-315-9989

Eメール: kantor-ppbjm@telkom.net

問合せ先: ミナハサ日本語学校基金

広報担当: 鈴木文彦

電話: (0463)21-1941

e-mail: suzuki@mb.scn-net.ne.jp

インドネシア人が日本で働くには？

ミナハサ日本語研修センター

日本語専任講師 上 杉 祐 子

海外の日本語教育には、勉強した後にどのようにして日本に行き、どんな在留資格で日本に住むかという課題が伴います。もちろん日本語を習っているすべてのインドネシア人が、日本へ行って勉強したり、働いたりすることを希望しているわけではありませんが、日本語学習の目的が日本へ行くことであっても、在留資格取得や費用面のハードルはたいへん高いと思います。2006年3月にミナハサ日本語研修センターでは、1年間履修した学生たちが初めて終了式を迎えましたが、「日本」への道はまだできていません。

また、正規のプロセスで留学（大学など）・就学（日本語学校など）・研修（企業や地方自治体など）の在留資格をとって日本へ行くことになれば、日本へ行ってからも日本語を勉強する機会に恵まれますが、日本で働くことについて制限のない日系人や日本人の配偶者などの定住者は日本語教育を受ける時間、場所なども提供されていません。1990年の入管法の改正でラテンアメリカからの日系人2世、3世の「デカセギ」による日本定住も増えましたが、日本語習得で同様の問題がおきています。働くためには、それぞれの仕事の分野の資格や専門日本語も必要です。それで日本で働けても、働く職域は単純労働になってしまうことが多いようです。

どこの国でも形式は違っていても出入国管理が行なわれていて、たとえば日本人がインドネシアで働く際には、ヴィザを取って入国し、KITASを申請するという「やや厄介な」方法ですが、それでも在留資格は取得できます。

一方、インドネシア人の在留資格は、どうなっているのでしょうか。外国人の在留資格は、日本でできる活動、身分などによって次のように分かれています。1. 外交 2. 公用 3. 教授 4. 芸術 5. 宗教 6. 報道 7. 投資・経営 8. 法律・会計業務 9. 医療 10. 研究 11. 教育 12. 技術 13. 人文知識・国際業務 14. 企業内転勤 15. 興業 16. 技能 17. 文化活動 18. 短期滞在 19. 留学 20. 就学 21. 研修 22. 家族滞在 23. 特定活動 24. 永住者 25. 日本人の配偶者 26. 永住者の配偶者等 27. 定住者

これらは「日本に利益となる外国人を受け入れ、不利益となる外国人を排除する」という政策に基づいているのでしょうか。しかし、実際には「留学」「就学」で勉強している留学生の資格外活動でしている週28時間以内のアルバイトも、技能研修生制度による3年間の研修・実習も、労働力として欠かせません。また、少子高齢化による就業者減を補うため、年に60万人の外国人移民を受け入れたり、人の移動が自由化されたりしなくては、経済力が下がってしまうとも言われています。ただし、日本は多文化共生社会をめざそうというスローガンは掲げられているものの、まだ積極的な移民政策はありませんし、文化や習慣の異なる外国人が住むのは簡単でないはずで、「夢のような国」というわけにはいきません。

インドネシアの人たちが、勉強した日本語を使って各人の目的に向かっていけるようになればいいと願っていますが、特に日本で働くことについては、まだまだ懐疑的にならざるをえません。

Kita so mo pulang ke Jepang

The Japang Foundation
Junior Japanese Language Expert
吉田好美

初めての投稿で、帰国報告というのもおかしい話ですが、どうぞおつきあいください。

私はこの2年間、Japang Foundation 国際交流基金からの派遣で、北スラウェシ中等教育機関での日本語教育に携わってきました。中等教育ですから、高校生に日本語を教えることも仕事ですが、最大の目的は高校の日本語の先生達に日本語および日本語教授法を伝授するということでした。

ひとつの学校にだけ勤務するのではなく、日本語教育を行なっている高校を巡回指導していました。マナド市内やミナハサ県はもちろん、コタモバグやサンギル島へも行きました。コタモバグは完全イスラムの世界で、マナドとは別世界。サンギル島はヤシの木やバナナの木がわさわさはえていて、ジャングルジャングルしていますが、キリスト教徒が多くて教会が多い景色は、どことなくマナドっぽかったです。いつもどんな訪問先でも、生徒達から歓迎を受け、いろんな質問をされました。日本の高校生の学校生活についての真面目な質問から、「パニキ好きですか？」や「<風雲たけし城>や<欽ちゃんの仮装大賞>に出るにはどうしたらいいですか？」など、ほほえましい質問まで出て、いつも楽しいです。また、日本からこんなに離れたところでも、日本語を勉強している人たちがいるというのは、日本語教師冥利につきます。

他にも、高校の先生達を集めて日本語や日本語教授法の研修もしました。研修は、簡単にいうと「教えるときには行き当たりばったりで教えないようにしましょう。」「授業計画を立て、準備してから教えましょう。」ということを指導します。教師に限らずどんな仕事でも「計画－準備－実行」というプロセスを踏むのが当然だと、日本人は考えるのですが、こちらの皆さんは必ずしもそうではなさそうなので、その意識のギャップを埋めるのが難しかった。

高校生用の教科書も作りました。2004年からカリキュラムが変わり、それに併せてインドネシアの教育省と Japan Foundation が共同で新しい教科書を作ることになり、その作業に携わることができました。

プライベートでは、ダイビングのライセンスもとって、ブナケンでのダイビングにもはまりました。休みの日はもちろん、急に授業がなくなったとき（「今日は校長先生の誕生日パーティです。」「今日は〇〇先生の結婚式です。」という理由で授業がつぶれる）なんかに、狂ったように潜りに行っていました。いつもダイビングインストラクターのエリさんにお世話になっていました。ありがとうエリさん！！

再びマナドの地を踏むことがあるかどうかわかりませんが、これからもこの地で日本語を勉強する高校生や日本語の先生たちが、いつか日本との梯子になってくれることを祈りつつ、私は日本へ帰ります。皆様、どうかこれからもお体に気をつけて、北スラウェシでの生活を楽しんでください。またお会いできる日を楽しみにしています。Sampai Junpa!!

